

つくばね vol.27no.4

● 目次

- 1 DLを使いこなそう
- 4 明治時代の英語教科書
- 7 シリーズ・電子図書館の現状 (4)
- 8 本学教官寄贈著書紹介
- 10 私の一冊
- 11 図書館実務研修を終えて
- 11 とびっくす
- 12 掲示板

DLを使いこなそう — 電子図書館のススメ —

西原 清一

DLとは? Tulipsとは?

‘電子図書館’つまり‘Digital Library’を略記したものが、DLです。そして、Tulipsとは‘筑波大学のDL’の愛称です。ネーミングは物理学系のU教授によるもので、Tsukuba University Library digitized Information Public Serviceの頭文字を並べたものです。が、実は、Tulipsという愛称の方が先にあって、これに後からこじつけをしたのです。それにしても、ナカナカうまいものですね。Tulipsのホームページは図1のようになっています。チューリップの花柄をあしらったロゴは、デザイナーもはっきりにしている正規のもので、単なる挿絵ではありません。

本学の電子図書館は、実用をめざした先導的DLとして、京大と共に国立大学初の予算措置を受けてスタートしました。平成10年1月システム導入、正式な発足は同3月でした。上記の逸話は、当初の熱気を伝えたくて、紹介したものです。

電子ジャーナルの衝撃!

これまで学術雑誌は、紙に印刷した冊子体のもので普通でした。しかし、ここに来て、急速に電

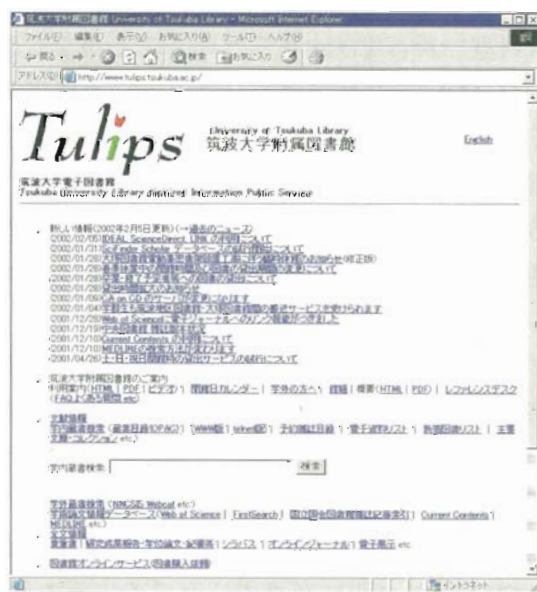


図1

子ジャーナルが普及し、論文や研究資料はコンピュータディスプレイの上で見えるものに変貌しつつあります。これは、印刷術の発明以来の太変革といってもよいでしょう。

印刷媒体から電子媒体へと変わること、どのような影響があるのか? まず利点としては、製本運送のタイムディレイがない、複数の人が同時に

アクセスできる、図書館へ足を運ばなくてもよい、検索効率がよい、保管場所を取らない、などがすぐに挙げられます。一方、紙媒体が無しでは記録(アーカイブ)としての不安が残る、ハードコピーとしての最終形態がいまいになり改ざんの恐れが生じる、著作権の問題が煩雑になる、購読契約の仕方が多様になる、ディスプレイは目が疲れる、などの問題も生じます。

このような利点や問題点をさらに突き詰めていくと、今後、さらに激しい変化が訪れるであろうということが見えてきます。たとえば、論文の中にアニメーションや音声を載せたり、メールアドレスを介して直接著者に質問したりすることもできます。

さらに、従来型の図書館の役割が大きく様変わりするでしょう。象徴的にいえば、勉強・研究はもっぱら自室で行い、ちょっと飽きたら散歩がてらに図書館に行って休憩する、というような逆転現象が起こるかも知れません。実際、私自身は図書資料室で新着雑誌を見るということがなくなりました。図書館に喫茶室を…などという要求が出てくるかもしれません。だからといって、現在の図書館がなくなるということはないでしょう。むしろ、貴重書や記録の保存という意味での重要性を増し、いわば知的財産の博物館という色彩が出てくると思います。

また、図書予算の厳しさを少しでも緩和しつつも情報アクセスの太いパイプを維持するためには、複数の大学や図書館がコンソーシアムを形成して、出版社との購読契約の交渉に臨むというような新しい局面も発生することになります。この点については、結局‘落ち着くところに落ち着く’のでしょう。重要なのは、じつは電子ジャーナルの意義は、本来、地理的・経済的な格差を緩和する方向に導いてくれることにあると思っています。DLには、学生・研究者から一般市民まで、多くの人に、公平な環境を用意してくれるというメリットを期待しています。

研究スタイルが変わる？ その素描

いま仮に、あなたが何か研究上のアイデアを

思いついたとします。もしそれがすでに誰かによってなされていたとしたら？それをどうやってチェックしますか？経験的に同じ様な研究論文が載っているような雑誌を調べたり、同僚に訊いたり、研究会で発表してみても反応を待ったり、…が従来のやり方でしょうか。

しかし、これからは違います。まず、Tulipsのホームページにある‘オンラインジャーナル’をクリックします。すると本学で契約している電子ジャーナルの全タイトルの本文を見ることができます(図2)。また、‘学術論文情報データベース’のリンクからも多くの論文のabstractやfull textにアクセスできます。例として、いま目の前のパソコンからINSPEC(2002年3月20日まで試験導入)にアクセスしたところ、2002年4月発行予定の雑誌‘Information Processing Letters, Vol.82, No. 1’の全文データが取れてしまいました！これを書いているのは1月31日午後3時過ぎですから、発刊よりはるか前にアクセスできたわけです。個人的には、無償のResearchIndex(<http://www.researchindex.com/>)も、研究論文の調査に便利です(図3)。おなじみのGoogle(<http://www.google.com/>)などのポータル・サイトも、十分研究に使えます。

というわけで、いまや冊子体の雑誌を待っている仕事にならないという状況が現出しています。何とも気ぜわしい話ですが、分野によっては二番煎じは評価ゼロとされてしまうので、やむをえません。もちろん、ネットの上でこのようにあ

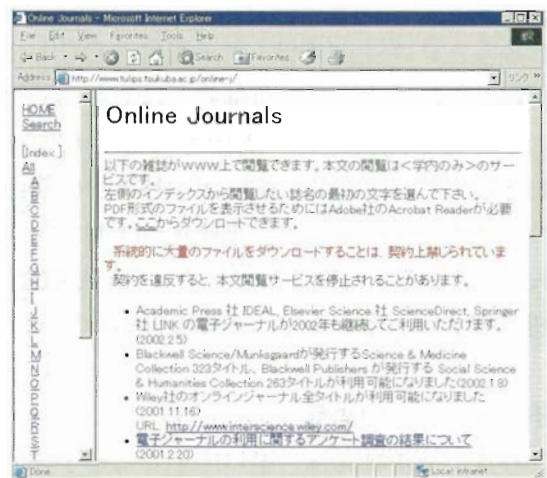


図2

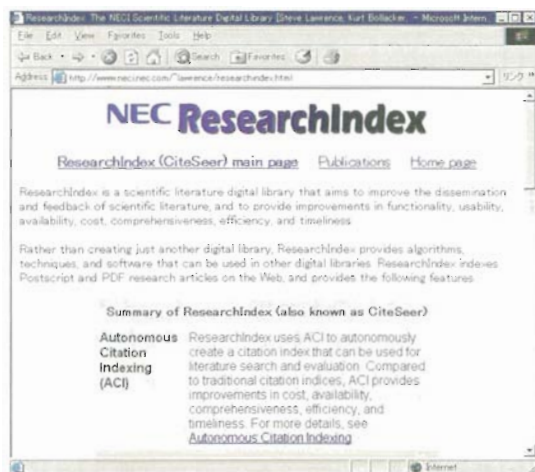


図 3

わたくしはやるばかりが勉強であり研究であるわけではないのですが。

DLのゆくえ、電子ジャーナルを越えて

上に述べたように、研究論文は冊子体として刊行される以前に(pre-publish)いち早く、ネット上で見るということが起こっています。さらには、刊行される予定の無い(non-publish)内部レポートや学位論文に至るまで検索の対象となります。大学や研究所やプロジェクトのWEBサイトを訪れて、ディスカッションしたり、奨学金つきの院生募集や空きポストを見つけたり、…というようなコミュニケーションも盛んになるでしょう。

このような Nirvana 境を誰でも享受できるようにするには、どのような課題があるかを考えて見ます。個人的には、情報アクセスには次の3段階があると思っています。

段階1：情報検索（幅広く）

段階2：情報探索（深く）

段階3：情報交流（コミュニケーション）

段階1は、欲しい情報を取りこぼすことのないように広く網を張り、絞り込む処理です。例えば、世界中の全ての情報の中から、数件～数十件程度の精選したものに絞り込む作業です。段階2は、精選した情報の周辺を歩き回る作業です。段階3は、ディスカッションをしたり、こちらの情報の提供も行うレベルです。

この諸段階が速やかに行える環境が理想です

が、現実はまだそこまでは至っていないと言わざるを得ません。まず、段階1については、検索サイトの決定版が現れて one-stop shopping ができればと願っています。また、簡潔で強力な検索条件の標準表記法、それに、個人的に常に目を配りたい情報源のカスタマイズ機能も欲しいものです。これは、今後の研究開発に大いに期待したいところです。とは言え、ネットはいわば手元にある世界最大の百科事典（検索エイドつき）として、すでに十分役に立っています。また、段階2に肉薄する機能として、ResearchIndex のように、ある研究論文を手がかりに、それを引用している最新の論文を網羅的に検索してくれるなどという芸当は、一昔前には考えられなかったことです。

先に掲げた3つの段階が達成される時がいつ来るかはわかりません。それは案外早いかもしれません。発刊前に研究成果がどんどんネット上に流れるような時代になれば、出版社が発行する商品としての電子ジャーナルというものの自体がかなり変容していることが予想されます。

DLは大学の死活を握る

筑波大学の Tulips は、幸い、全国の大学のDLの中で先導的な役割を果たしてきたと思います。この度、開設4年を経て、新システムに更新され、iモードによる個人レベルの利用のための便宜が図られるなど、常にいろいろな改良・模索が試みられつつあります。これからは、4年間に蓄積した経験をどのように生かしていくか、流動的な状況での的確な判断が要求されます。

今後、先に述べたような検索まわりの技術的な課題に加えて、情報発信するDL、情報ハブとしてのDL、情報リテラシーの啓蒙教育との連動など、多くの課題があります。

DLは、従来の図書館にも増して、その大学の教育・研究を左右するインフラとして、さらに地域や社会との接点として、大きなカギを握っています。そのためには、例えば、学位論文のDLへの登録申請は、大学構成員として参加できる重要な協力の一つといえるでしょう。

（にしはら・せいいち 電子・情報工学系教授）

明治時代の英語教科書

大熊 榮

日本における英語教育は明治維新以前から始まっていて、『諳厄利亞興学小笈』* (1811)や『諳厄利亞語林大成』* (1813)などの辞書が編集された(*印は本学図書館所蔵)。文法は「文典」と呼ばれる教科書によって学ばれたが、蕃書調所から1860年ごろに『英吉利文典』が出版されたほか、輸入された『クワッケンボス文典』や『ピネオ文典』が前述の蕃書調所(のちの開成所)や慶應義塾などで使われていた。読本として広く使われていたのは『ウィルソン』Willson*『サンデル氏ユニオン』Sanders' Union Reader*『スウィントン』Swinton*など、編者の名を冠して呼ばれる教科書シリーズである。1860年代に英語学習者が急増したことは、当時ポケット辞書として人気を博した『英和対訳袖珍辞書』(1862)の編纂者堀達之助の英文による序文に記されている。1866年には開成所から『英語階梯』『英語訓蒙』が出版された。和綴りで“English Spelling Book”という英文表題もついている『英語階梯』*はA B C

から始めて、単語の発音を学び、簡単な文を読む国産の英語入門書で、資料的価値は大きい。

維新直後、天下国家を担うエリート教育として英語教育が重視され、開成所に16歳以上20歳以下の士族の子弟を全国から集め、中濱万次郎や外国人教師を招いて教育の任に当たさせた。そこで使われた教科書は『クワッケンボス文典』や『ウィルソン』であった。教授方法に正則と変則があったことも知られている。発音に留意するのが正則であり、変則はもっぱら意味の斟酌に重点を置く。福沢諭吉の慶應義塾は変則を大幅に採用したため、その卒業生は英語が話せなかったとされる。

1872年の「学制頒布」は日本がエリート教育から国民教育へと舵を切り換える第一歩であり、その内容は全国を大学区、中学区、小学区に分け、それぞれに次の表のような数の学校を設置するというものであった。

	区あたりの数	全国合計
大学区 (大学校)	8	$8 \times 1 = 8$
中学区 (中学校)	32	$8 \times 32 = 256$
小学区 (小学校)	210	$8 \times 32 \times 210 = 53760$



「諳厄利亞語林大成」



「諳厄利亞興学小笈」

これだけの数の学校を一気に創設することになって生じた大問題は財政負担と教員の確保である。政府は「学制頒布」と同時に「東京師範学校」を創設、その後全国に作られる「小学校」教員養成のための「師範学校」教員育成を開始した。さらに3年後の1875年には「東京師範学校」の中に「中学師範学科」が設置され、中学校教員養成に着手した。中学校はかつての「藩校」のように主として英語の教科書によって「専門学」を修めることとされた。そのような学校の教員養成が目的なので、「東京師範学校」での教育は M. M. スコットのようアメリカ人やアメリカの師範学校

Training School へ留学した伊澤修二、高嶺秀夫のような日本人エリートがその任に当たった。「中学師範学科」は英語で授業が行われる唯一の学校であるとともに、学費が全額支給されたので、私立英語学校などからの応募者が殺到したとされる。

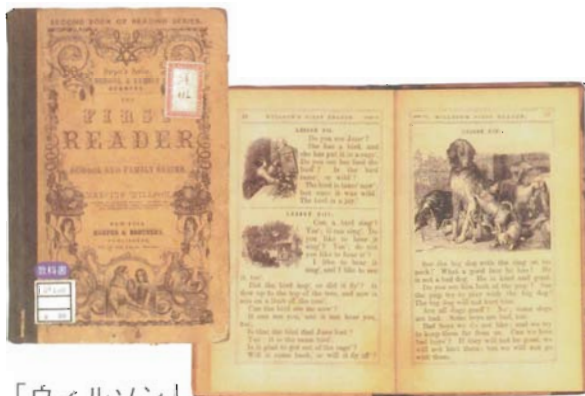
1879年に政府は「学制」を廃止し、アメリカ人モルレーの草案により地方分権主義的な「教育令」を制定するが、中央集権志向の強い日本の実状に合わず、国民教育の停滞を招く。この停滞を救ったのが時の文部大臣森有礼による1886年の「学校令公布」である。これによって帝国大学、師範学校（尋常、高等）、中学校（尋常、高等）、小学校（尋常、高等）の制度が全国画一的に整備された。「東京師範学校」は「東京高等師範学校」となり、尋常師範学校を卒業して初等教員を経験したものを受け入れ、中等教員を輩出することとなった。その後1899年の「学校令」改正で「尋常中学校」は「中学校」、「高等中学校」は「高等学校大学予科」となった。また「高等女学校」の制度を整え、遅ればせながら女子教育の改善がなされている。

制度改革に伴う英語教員需要の増大と英語学習

熱に応えるべく、「東京高等師範学校」は1894年に「英語専修科」を設置し、官設で唯一の英語教員養成機関となり、週27時間のうち17時間を英語に充てるカリキュラムを組んだ。この「専修科」は「英語学部」（1898）を経て1912年には「英語専攻科」となるが、その卒業生には1899年に始まった教員検定制度により無条件で英語教員免許が与えられた。

明治時代の国民教育は制度の制定と教員の養成に手間取り、とりわけ英語教科書については外国出版の「文典」「読本」などで間に合わせるしかなかった。本学図書館所蔵教科書にはその種の教科書として貴重なものが豊富にある。*Easy Lessons** by S. R. Scofield (1864) や Epes Sargent による *The Standard Speller** (1870)、*The Standard Reader** (1872) あるいは *The New American Reader** (1871) などはアメリカ人向け英語入門教科書だが、明らかに日本人向け教科書のモデルになったと思われる。

文部省編輯局が森有礼の意見を容れ、ウォルター・デニングの編纂による *English Readers** を出版したのは1887年、維新からおよそ20年後の



「ウィルソン」



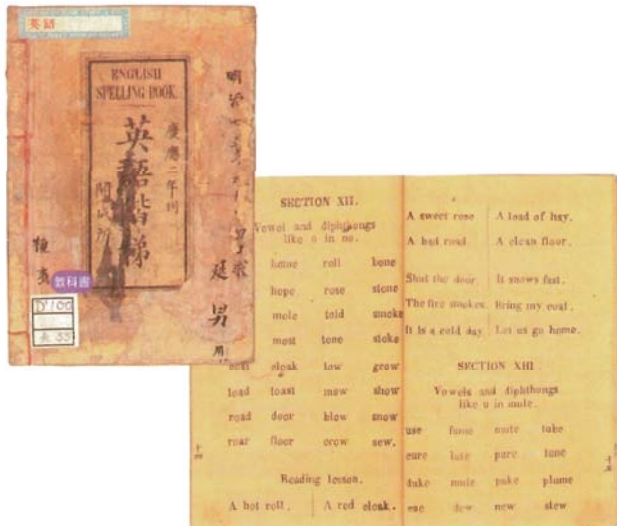
「サンデル氏ユニオン」

「スウィントン」

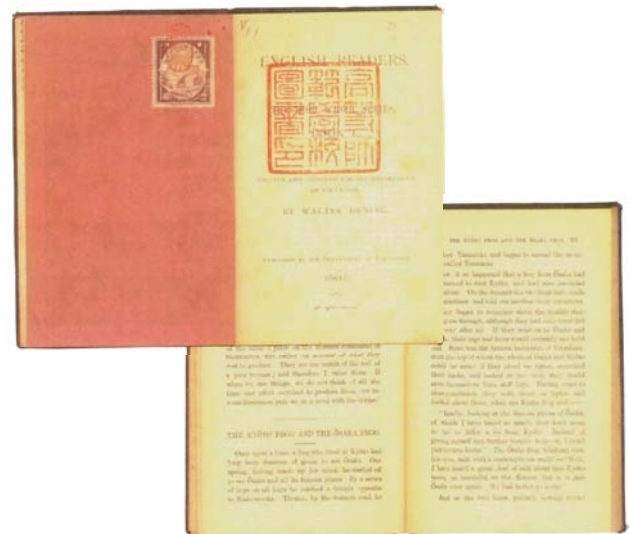


「スウィントン」





「英語階梯」



「English Readers」

ことである。「The High School Series」という副題からして当時の「高等学校」学生向け読本で、6巻から成っていた。内容はさながら英語による修身教科書である。「この読本シリーズの目的は日本人学生が多少なりとも馴染んでいる考えを英語で表現することにある」とデニングは「序文」に書き、主に日本や中国の故事を自ら英語で書いて、数多くの短いエッセイをこのシリーズに集めた。

デニングの読本に先立ち、*A Grammar of the English Language for Japanese Students** という文典小冊子が W. D. コックスによって書かれ、日本橋の「Z. P. Maruya」から1880年に出版されている。その「序文」で著者は日本人が英文法をどう見ているかに触れている。「この国では、英文法は西洋の科学と文学が詰まった倉庫の扉を開ける鍵という価値しか持たない。そのことは容易に見て取れると思う。この点で英文法は国語における読み書きと同類と見なされている。つまり真の知識としてでなく、知識を手に入れる手段として見なされているのである」そのような文法観に込めるべく、「言語構造の基礎となる主要原理」として語を8品詞に分類して解説し、練習問題を与えている。このほかにも1889年には東京帝国大学外国人教師ジェイムズ・ディクソンによる *English Composition** が「Hakubunsha Series

of English Textbooks」として出版される。ここには品詞論のほかに統語論が加えられ、さらに“Current Bad English”として21の英作文例とその添削が添えられている。内容は相当に高度で、「序文」に「教員向け」とあることからすると、日本人英語教師のための英作文指導用教科書であったと考えられる。1901年になると三省堂から *Cathcart's Literary Reader** 2巻が出版される。これは19世紀英米の作家たちが書いた文章のアンソロジーであり、英語教員志望者たちが教室で読んだものと考えられる。

これらの「舶来」の読本、文典、英作文教科書から国産英語教科書へと進化していくわけだが、同時にまたそうした教科書で学んだ英語教師たちが生徒にどのように英語を教えたかも容易に想像がつく。日本の英語教育史にとって貴重なこれらの教科書が改めて研究されることは、英語学習熱が高まりをみせる今日においてこそ、いっそうの意義を持つように思われる。同種のブームは明治時代にもあったからである。

(この稿を書くに当たり櫻井役の名著『日本英語教育史稿』(1936, 復刻1970)に負うところ大であった。記して感謝したい。)

(おおくま・さかえ 現代語・現代文化学系教授)

シリーズ・電子図書館の現状 (4)

システム紹介

平成14年1月に、電子図書館システムの更新をしました。今回はこの新しいシステムの概要をご紹介します。

1 利用者端末の増強

館内の利用者用パソコンの台数が100台から150台に増えました。パソコンの性能自体も向上しています。

館内の端末数の増加に伴い、蔵書検索や電子ジャーナルの閲覧に用途を限定していた「電子図書館専用端末」は一部を除いて廃止しました。

2 サーバ機能の充実

OPAC (蔵書検索) 用のサーバ計算機環境が強化になりました。

OPAC サーバは、まったく同じ構成のものが2台用意されています。この2台のサーバに「ロードバランサ(負荷分散装置)」が繋がって、利用者からのリクエストを均等に割り振ります。期末試験期間等利用が多い時でも、利用者の皆さんをお待たせすることがなくなると期待されています。

サーバには4ギガバイトのメモリが搭載されています。更新前のシステムではOPACで使用するデータベースのインデックスはディスク上に保存されていましたが、今回のシステムではそれをメモリの上に保持することにより、検索スピードが速くなりました。

また、主要な計算機はギガビット・イーサネット

インターフェースを通して高速キャンパスネットワークに接続されています。全文情報(論文等のページイメージ)を高速で転送することができます。

3 携帯電話用 OPAC の提供

携帯電話端末から利用できる OPAC の提供を開始します。現在は、<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/opac/keitai/> で試験的にアクセスすることができます。書誌の検索と、本人利用状況の確認が可能ですので、お試しください。貸出中の図書予約等は今後対応していく予定です。

なお、図書館内での携帯電話の通話は他の利用者の迷惑になるため、ご遠慮いただいています。館内での携帯電話の利用は、メール・蔵書検索等データ通信に限定してくださるよう皆様のご協力をお願いいたします。

4 動画配信システム

旧電子図書館システムでは中央図書館内の特定の端末でだけ可能だったビデオ・オン・デマンドシステムですが、更新後は学内外で利用が可能になりました。

音声付きの動画情報を、リアルネットワーク社の real movie 形式で提供します。附属図書館の利用案内ビデオを公開しています。図書館のトップページの「利用案内」からリンクが張ってあります(ビデオを視聴するにはパソコンに RealPlayer をインストールする必要があります)。



【携帯電話端末用 OPAC の画面例】

5 電子図書館システムの今後

今後提供を予定している機能として、次のようなものがあります。

・Z39.50 ゲートウェイ機能

Z39.50 は、情報資源を検索するための手順を定めた標準的なプロトコルです。まず、蔵書検索用のサーバを Z39.50 対応にして公開します。これによって、Z39.50 クライアントから本学の所蔵情報が検索できるようになります。

また、内外で公開されている Z39.50 サーバに対して横断検索ができる Web ベースの Z39.50 ゲートウェイ機能を提供します。特定の Z39.50 サーバをあらかじめ分類して検索対象とすることができるので、「生物科学系のジャンルに強い大学の図書館が公開しているサーバを横断検索する」といったことができるようになります。

・個人情報サービス機能

現在の Web ベースの OPAC の画面構成は誰が使っても同じですが、これを個人ごとにカスタマイズ可能なものにしていきます。

また、あらかじめ登録しておいた検索語にヒットする図書が利用可能になったり、登録しておいた雑誌の最新号が到着した場合そのことを通知してくれるサービスも計画中です。

・動画によるナビゲーション機能

動画配信システムと OPAC を連携して、検索した図書が館内のどのあたりに配架されているかを静止画・動画を使って案内するシステムを図書館パッケージメーカーと協力して開発中です。

電子図書館システムについてご意見等ございましたら、下記までご連絡ください。

※お問い合わせ先：電子情報係（内線2470）

メールアドレス：voice@tulips.tsukuba.ac.jp



本学教官寄贈著書紹介

平成13年10月～12月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介いたします。

（敬称略，寄贈者五十音順，所属は平成13年度のものであります。〔 〕内は配架場所と配架番号です。）

井田仁康（教育学系），村山祐司（地球科学系）

- ・授業のための地理情報：写真・地図・インターネット / 伊藤悟共編，古今書院，2001〔中央 375.33-I18〕

大野正道（社会科学系）

- ・手形法・小切手法入門，信山社，2001〔中央，大塚 325.6-O67〕

門脇厚司（教育学系）

- ・社会力（いきるちから）が危ない！学習研究社，2001〔中央 367.6-Ka14〕

川西宏幸（歴史・人類学系）

- ・初期文明の比較考古学 / B. G.トリッガー著，同成社，2001〔中央 209.3-Tr5〕

工藤博（物理工学系）

- ・Ion-induced electron emission from crystalline solids. Springer, c2002 (Springer tracts in modern physics ; 175)〔中央 420.8-Sp8-175〕

駒井洋（社会科学系）

- ・グローバル・ディアスポラ / ロビン・コーエン著，角谷多佳子訳，明石書店，2001（明石ライブラリー；32）〔中央 334.4-C83〕
- ・新生カンボジア，明石書店，2001〔中央 302.235-Ko57〕
- ・Foreign migrants in contemporary Japan / translated by Jens Wilkinson. Trans Pacific Press, 2001 (Japanese society series)〔中央 334.41-Ko57〕

小松英雄（名誉教授）

- ・日本語の歴史：青信号はなぜアオなのか，笠間書院，2001〔中央 810.2-Ko61〕

近藤康史 (社会科学系)

- ・左派の挑戦：理論的刷新からニュー・レイバーへ。木鐸社、2001 [中央 309.333-Ko73]

品川芳宣 (社会科学系)

- ・役員報酬の税務事例研究：報酬・賞与・退職給与の判決等の集大成。財経詳報社、2001 [大塚 336.98-Sh58]

末廣直樹 (機能工学系)

- ・Sequence design and applications for CDMA systems / edited by Pingzhi Fan, Mike Darnell. Southwest Jiaotong University Press, c2001 [中央 547.5-F14]

田中洋子 (社会科学系)

- ・ドイツ企業社会の形成と変容：クルップ社における労働・生活・統治。ミネルヴァ書房、2001 (Minerva人文・社会科学叢書; 51) [中央 366.5-Ta84]

塚田泰彦 (教育学系)

- ・語彙力と読書：マッピングが生きる読みの世界。東洋館出版社、2001 [中央 375.85-Ts52]

鳥越皓行 (社会科学系)

- ・都市近郊の里山の保全：里山保全への現代的な課題を考える / トトロのふるさと財団編。トトロのふるさと財団、2001 (トトロブックレット; 2) [中央 519.8-To73]

直江俊雄 (芸術学系)

- ・芸術による教育 / ハーバート・リード著；宮脇理、岩崎清共訳。フィルムアート社、2001 [中央、体芸 707-R21]

中村了正 (臨床医学系)

- ・小児科学 / 白木和夫、前川喜平総編集；伊藤克己[ほか]編集。医学書院、1997 [医学 493.9-Sh83]

鍋島達弥 (化学系)

- ・有機化学のしくみ / 加藤明良共著。三共出版、2001 [中央 437-N11]

芳賀脩光 (体育科学系)

- ・運動生理・生化学辞典 / 大野秀樹編者代表。大修館書店、2001 [中央、体芸、医学 780.19-O67]

濱名恵美 (現代語・現代文化学系)

- ・性のペルソナ：古代エジプトから19世紀末までの芸術とデカダンス；上、下 / カミール・パリア著；鈴木晶[ほか]訳。河出書房新社、1998 [中央 702-P15]
- ・Hamlet and Japan / edited by Yoshiko Ueno. AMS Press, c1995 (The Hamlet collection; 2) [中央 932.33-U45]
- ・Hot questrists after the English Renaissance : essays on Shakespeare and his contemporaries : in commemoration of the thirty-fifth anniversary of the Shakespeare Society of Japan / editor in chief, Yasunari Takahashi. AMS Press, c2000 [中央 930.23-Ta33]

村田翼夫 (教育学系)、天野正治 (名誉教授)

- ・多文化共生社会の教育。玉川大学出版部、2001 [中央 376.9-Mu59]

山下浩 (現代語・現代文化学系)

- ・The faerie queene / Edmund Spenser ; edited by A.C. Hamilton ; text edited by Toshiyuki Suzuki. Pearson Education, 2001 (Longman annotated English poets) [中央 931.3-Sp4]

山本雅之 (基礎医学系)

- ・遺伝子の構造と機能。共立出版、2001 (シリーズ・バイオサイエンスの世紀; 第1巻) [中央、医学 467.2-Y31]

渡辺三枝子 (心理学系)

- ・キャリアカウンセリング入門：人と仕事の橋渡し / E. L. ハー共著。ナカニシヤ出版、2001 [中央 366.29-W46]





私の一冊

近藤 康史

『左派の挑戦 — 理論的刷新から

ニュー・レイバーへ』

近藤康史著（木鐸社）

[中央 309.333-Ko73]



学生あるいは一般の人々からよく投げかけられる質問で、なかなか答えづらい質問がある。

「○○（政治家などの人名、あるいは政党名）は、左（翼）ですか？それとも右（翼）ですか？」

「○○（同上）は、保守でしょうか、革新でしょうか。」

例えば、現在の日本政治を念頭において、「民主党」や「田中康夫」といった名前を当てはめてみてはいかがだろうか。現在、右—左、保守—革新の軸は揺らぎ、その指標は見えにくい。社会主義の崩壊、冷戦の終焉、日本においては55年体制の崩壊といった過程の中で、それまで不変とすら

思われた構造が解体され、右—左、保守—革新の意味も変化しつつある。これは日本だけの状況ではない。ヨーロッパ諸国においても、次々と左派政権が実現する中、イギリス労働党であれ、ドイツ SPD であれ、その姿は従来捉えられていた「左翼」政党とは姿を異にしており、やはりそれらが「右なのか左なのか」「保守なのか革新なのか」という点で、一般の市民ばかりか研究者の評価も分かれている。本書は、このような状況について、イギリスの政治理論や労働党を採り上げて考えてみたものである。

しかしながら、本書は単に「左派」についてのみ論じたものではない。現在の日本においてマスコミや論壇を賑わせている無党派層や政治不信の事例を見るまでもなく、右派政党であれ左派政党であれ、その統合能力の低下は否定しがたい。おそらく上記のように、これまで前提とされてきた指標が失われたことも一因であろう。この状況の中、どのような政治的統合が可能なのか、という論点こそが本書の最大の焦点である。

おそらく、そのような無党派層の中心をなす若い世代に、今のところ筆者も世代的には属すると思われるので、そのような世代と価値や発想を共有しうる者による分析として、本書が一定の新しさや価値を持つことを期待している。現在、従来型の政治に対してわかりにくさや不信感を感じている方にこそ、読んで頂ければ幸いである。

（こんどう・やすし 社会科学系講師）





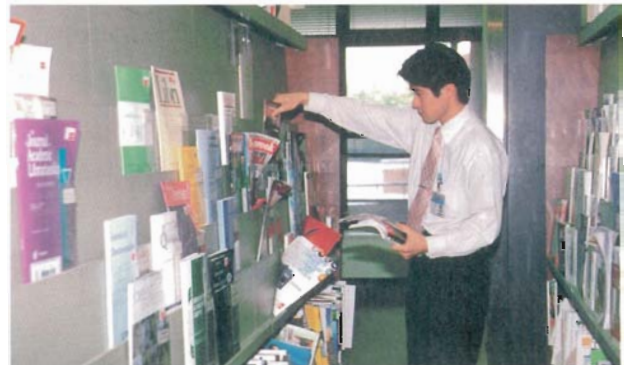
図書館実務研修を終えて

三島 昇

筑波大学という規模の大きな図書館での実務を経験することによって図書館業務をより深く理解するために、平成13年10月から11月の2カ月間、中央図書館と医学図書館でお世話になりました。

最初、図書館を案内されたときに、所蔵している資料の膨大さと、利用者の多さに驚かされ、筑波大学附属図書館の規模の大きさを実感させられました。また、筑波大学は多くの教育・研究組織があり、いろいろな国からの留学生もいるため、利用者の要望も様々だと思うのですが、職員一人一人が図書館業務全体を深く理解しているということも実感させられました。普段の私は、自分の担当業務を理解するのに精一杯で、図書館業務全体の理解が不十分なため、担当業務以外のことについて聞かれても自信をもって答えられずに、適切な対応ができていませんでした。やはり、全体の流れがわかっていなければ自分の担当業務についても不十分な理解しかできなくなってしまうと思います。これからは、図書館業務の全体の流れを常に頭に入れながら仕事をしていきたいと思えます。

確かに、パソコンシステムなど、県立医療大学



雑誌配架作業

と異なる部分が多く、初めは戸惑うこともありましたが、職員の方々が、ただでさえ自分の業務で忙しいのにもかかわらず、本当に親切にいろいろなことを教えてくださったおかげで、普段の業務ばかりでなく、今まで知らなかった図書館の基礎知識なども得ることができ、図書館業務というものを深く理解することができました。また、ほんの少しではありますが自信もついた気がします。職員の方々には本当に感謝しております。

この研修で学んだことをこれからの県立医療大学での実務に活かしていきたいと思えます。

(みしま・のぼる 茨城県立医療大学)



とぴらくす

〔学内〕

第242回附属図書館運営委員会（12月開催）

〔審議〕○貴重図書及び準貴重図書の指定について

〔報告〕○電子的資料について○国立大学図書館協議会理事会（平成13年度第3回）について○平成13年度大型コレクションの採択結果について○図書館部防災訓練について○旧東京教育大学重複雑誌の学系資料室貸出について

第243回附属図書館運営委員会（1月開催）

〔審議〕○平成14年度附属図書館年次計画案の策定について

〔報告〕○各専門委員会報告—ボランティア専門委員会（第5回）—○電子図書館システムの更新について○平日の貸出時間の拡大について○学術情報データベースについて○筑波大学附属図書館の蔵書構成について

情報リテラシー教育の支援

平成13年度第3学期に、情報リテラシー教育の一環として、情報処理上級科目「情報の探索と活用」が開講され、中央図書館及び第1学群棟実習室で講義と演習が行われました。この授業では、学術情報の適切な探し方から、得られた情報を用いた論文・レポートのまとめ方まで、10週にわたり8名の教官が担当し、図書館部職員が演習その他で支援しました。

第1週は山内附属図書館長の「文字・書物・情

報」と題した講義を通して、パピルスや写本など古代、中・近世の印刷媒体から文字情報の歴史を概観しました。各自が端末を利用しての実習では、学術情報処理センターのUTOPIAや附属図書館提供の各種データベースのほか、有用なインターネット情報の探索技法を習得することができました。一方、和装本を例に書誌について学んだり、情報倫理について理解を深めるなど、幅広い内容のプログラムとなりました。



掲示板

貸出時間の拡大について

利用者の皆さんから要望の強かった貸出時間の拡大を平成14年2月4日(月)から試行しています。

・実施図書館

中央図書館
 体育・芸術図書館
 医学図書館

・平日通常開館時(22時まで開館している日)

現行の貸出時間	10:00~20:00
新しい貸出時間	9:30~21:00

・休業期間中(17時まで開館している日)

現行の貸出時間	10:00~16:00
新しい貸出時間	9:30~16:00

*医学図書館は、20時閉館、貸出は19時まで。

なお、時間外開館時(17時以降)に貸出システムに障害が発生した場合には、貸出が停止になることがありますのでご了承ください。

筑波地区図書館と大塚図書館との間の搬送サービスの利用について

筑波地区の各図書館と大塚図書館の間では、それぞれに配架されている図書等を相互に取り寄

せて、貸出を受けることができる搬送サービスを実施しています。これまでこのサービスの利用対象者は本学の教員及び大学院学生に限定していましたが、平成14年1月7日から本学の教職員及び学生全員を対象を拡大しました。

詳しくは各図書館のメインカウンター、又はレファレンスデスクにお問い合わせください。

視聴覚メディア室 音楽CDの書架統合について

視聴覚メディア室の音楽CDは、いままで展示用書架と本体用書架に分かれていましたが、平成14年1月より、展示用書架の方に統合しました。

配架順序は、次のようにジャンル毎に分けて、その中を受入順にしています。

ジャンル名	シールの色	請求記号
交響曲	茶色	CD-交響-CLxxxx
管弦楽曲	橙色	CD-管弦-CLxxxx
協奏曲	赤色	CD-協奏-CLxxxx
室内楽曲	桃色	CD-室内-CLxxxx
器楽曲	黄色	CD-器楽-CLxxxx
声楽曲	緑色	CD-声楽-CLxxxx
現代音楽	青色	CD-現代-CLxxxx
全集	空色	CD-全集-CLxxxx